

大乘玄論の八不義

——慧均撰八不義について (2)——

三 桐 慈 海

多くの經疏を著わし無所得中道を標榜して、三論宗の祖とされる吉藏が、その思想基盤を中論においているこ

とは周知のことである。その吉藏が著わした中觀論疏十卷の始め因縁品を積すうちでは、その大半を八不の義を

解説することに費し、また別に大乘玄論卷二には八不義が収められている。しかしそれにもかかわらず吉藏の思

想が論じられるにあたっては、大乘玄論の八不義がその撰者に疑義があるとされていること、また吉藏の思想の

特色は二義諦に顯著であることなどから、その八不義については従来あまり言及されないきらいがある。幸い慧

均の八不義を見る機会を得てそれを比較対照し、いささ

かの考察を加えて報告することができた（慧均撰四論玄義八不義について」佛教学セミナー第12号・一九七〇年）その折に言及し得なかつたことなどを補足し、ここに一応の整理をしておきたいと思う。

吉藏が中觀論疏に示した次の文は、その八不に對する考え方を端的に表現したものと思われる。

以衆聖託二慧而生。二慧由二諦而發。二諦因八不而正。即知、八不為衆教之宗、歸群聖之原本。

若以二慧名為佛、二慧由二諦生、即以二諦為父母。若言二慧生佛、故以二慧為父母。二慧復由二諦而生、即

二諦為祖父母。二諦復由八不而正、即八不為祖中之祖。すなわち二諦と二慧とは相互に関わりあつて成立つのであるけれども、八不は常に二諦を正すその本質的な

のとしての祖父の祖の役割を果すとしている。このように吉蔵が説く無所得は八不を基本とするものであるが、その「八不に由って正す」ことは「二諦が二辺を遠離するを名づけて中道となす」ように、二辺の固執を遠離することであり、それが「中道佛性の不生不滅不常不断、即ちこれ八不なり」という中道佛性なのである。また「八不の無生はけだしこれ因縁生の無生なり。生を壊せずして無生を説く」とも述べ、中道佛性の宛然として有であり無である無執著の世界を、因縁生の無生としてあらわす。しかしもし因縁生ということが少しでも概念化され固執されるならば、それは即座に寂滅性として否定されなければならぬ。吉蔵が多くの注疏を著わしているくうえで常に留意したのは、この無執著の世界である因縁生無生に入ること、いかに表現することができるか、にあったように思われる。真諦に八不を具することを明かす項^②においては、世諦は性実を破し真諦は仮を示すという従来の説に対して、それは仮生に執著する病を破するためであるにすぎないとして、「正意は即ち然らず。世諦は実の生滅を破して不生不滅を明かし、真諦は仮生の宛然として即ちこれ無生なるを明かす。故に破せざるなり」と、ただ二諦による双否の繰返しのみを目的とし

ているのではないことを強調するのである。

巻第二末の浅深門第五には初章中仮義が引かれている。このなかで吉蔵は「中仮師は仮を聞いて仮の解をなす、またすべからくこの仮を破すべし。師云く、中仮師の罪重し、永く佛を見ず」と中仮師を批難し、「今、三論を聴いてまた解をなし以て心を安す。既に同じく心を安すれば、即ち俱にこれ有所得なり」と、その有所得を否定するけれども、^③中仮義そのものについては、「初章これ執を動かして疑を生じ」「中仮は即ち性執を破して疑を積する」ものとして、「性病もし去れば、この語もまた留まらず」とする限り、初学の者には必要な章門であると挙げるのである。その後を重ねて四重二諦と四重の八不を説明し、「四には、この三種みなこれ名言にして並びに悉くこれ生なり。言妄（忘カ）じ慮息んで、方にこれ無生なり。故に八不の言その旨深遠なり」と、いかに四重を重ねても結局は無生に入るべきであることを述べる。そして続いて「即ち末学の者は二諦はこれ教なりと遂守して、還たこれ語を投じて解をなす。由来は二諦これ理なりとして理見をなし、今は二諦を教となしてまた教見を成す。もし意を得れば境の教とみな妨ぐるなし。真俗は理に通ずるを以ての故に名づけて教となす」と、

時に適って理と教の用いられるべきことを説く。ここにも示されるように、吉蔵自身が強調する教諦の教も、もし執著すれば教見として破斥されなければならない。しかし因縁生無生を会得すれば、そこには理も教も區別することがなくなるのである。

吉蔵は、因縁生無生という語で表現せられる言忘慮絶の無所得を会得する目的のためにあらゆる方法を用いる。そしてその無所得への佛道の道程が、そのままに吉蔵の思想体系となったといひ得るであろう。まず初学者の固執を動かすために、初章中仮義を示して疑いを起こさせ、次いで因縁生による仮生をもって性実の執を破し疑いを除く。そのために三種方言・三種中道・三種智慧・四句分別などの、師の法朗より授けられたあらゆる教義を駆使するのであり、究極の目的である無生へと入らしめるのである。吉蔵が八不を力説するのは以上のような理由によると考えられる。

不生不滅等の八不は中論の第一偈に掲げられる根本課題であり、吉蔵においても群聖の根本として最も重視しなければならないことである。したがってその要旨がまとめられて八不義とされ、二諦義とともに別行していてもよいはずである。しかし大乘玄論所収の八不義が慧均

の八不義とほとんど一致していることから、その撰者について疑いもたれているのであり、ここに中観論疏の中にみられる八不の解釈と玄論の八不義との比較がなされなければならないことになる。最近その詳細な比較検討の成果が発表されるにいたつたので、ここでは略してそれにゆずることにする。ただ吉蔵が因縁生無生の中道佛性をいかに表現していくかにおいて、法朗の説を駆使していることを常に留意しつつ、次に残された課題を考えてみよう。

二

大乘玄論と慧均の八不義を対照するなかで、古くより問題にされている二三の箇處を検討してみよう。

先ず八不に約して三種中道を明かす文において、大乘玄論八不義の文は次のようである。

山中師对寂正作之。語待不語、不語待語。語不語並

是相待假名。故仮語不名語、仮不語不名不語。不名不語不為無、不名語不為有、即是無有不無世諦中道。但相對假故、可有説生、可無説滅。故以生滅合為世諦也。

真諦亦然、仮不語不名不語、仮非不語不名非不語。

不名非不語不為非不無、不名不語不為非不有。則是非

不有非不無真諦中道也。相對假故、可有說不滅、可無說不生。即是不生不滅故合為真諦也。

二諦合明中道者、假語不名語、假不語不名不語。非語非不語、即是非有非不有非無非不無二諦合明中道也。生滅不生滅合明、類此可尋也。

この文中の傍線「1」の部分は、慧均の八不義によると語待不々語々語々不語並是相待假名^⑦。

となつている。これを「語待不語語不語語不語並是相待假名」とすると、どのように読むのか理解し難い。大乘玄論のように、「語は不語に待し、不語は語に待す。語と不語とは並にこれ相待假名なり」とあったのが誤写されたのであろうか。しかしこれを「語待不語不語語語不語並是相待假名」として、「語は不語に待す。不語の語と語の不語とは並びにこれ相待假名なり」と読むことができる。これならば不語語と語不語が、次に続く文の假語と假不語とに関連することになり、文の内容も明瞭である。しかしいずれに読むにしても語の字が三字重なるなど、他の箇処にも見出し得ることはあるが、慧均の文は繁鎖であつて、大乘玄論の文の方が整理された形とすることができよう。

次に傍線「2」の部分を見ると、慧均の八不義には

假非不語不々名々非々不々語々不為不無不名不語不為不有^⑦。

となつている。このうち「不々名々非々不々語々」は、「不名非不語」を繰返すことによつて玄論の文と一致する。ところがこれに続く文「非不語と名づけざれば不無となさず、不語と名づけざれば不有となさず」は、既に指摘されているように、玄論の文が「非不無となさず」「非不有となさず」と非の字がそれぞれに一字多く、しかもそのままの意味をとると、玄論が誤りをおかしていることになる。もし非の字を加えるならば「不名非不語不為非不有、不名不語不為非不無」と、有と無を置きかえなければならぬことになろう。

これを、いづれかが伝承の過程で誤写された、とするのは容易である。しかしまた次のように考えることもできないであろうか。慧均の文では先に「不語」を「無」に「語」を「有」に変えて不有不無の世諦中道を表わし、今また「不名非不語、不為不無、不名不語、不為不有」と、「非不語」を「不無」に「不語」を「不有」に変えて、非不有非不無の真諦中道を示している。八不義のここに記されている文が、僧詮によつて語られたとされているのであるが、慧均もまたその二諦義の中では有無・

非有非無の語をもってさかんに二諦を説明しているの
あり、当時の有無をもって真俗二諦を解説する傾向に依
っていることを示すものである。

これに対して、吉蔵は有無をことさらに多く用いて二
諦義を説明しているわけではない。中論疏卷二本では
「次明真諦具八不」の項で「真諦中道を明かさば、空の
有を以て世諦となし、有の空をもって真諦となす。空の
有を以て世諦となす、世諦は則ちこれ仮生仮滅なり。世
諦の仮生に対して真諦の仮不生を明かし、世諦の仮滅に
対して真諦の仮不滅を明かす。不生不滅を真諦中道とな
す^⑧」と述べているように、むしろ師法朗の三種方言の一
つ、「仮生不可言生、不可言不生。即是世諦中道。仮不
生不可言不生、不可言非不生。名為真諦中道」の表現方
法を好んで用いるようである。

このように考えてみると、慧均の八不義が「不有」と
「不無」であり、玄論が「非不無」と「非不有」である
ことは、その後の句が「則是非不有非不無真諦中道也」
であることから、玄論の方へ非の字が加えられたのでは
ないかと思われるのである。しかしこれも意味の上から
すれば、何故に有と無の入れかえがなされなかったのか、
ということの問題は残る。あるいは「不為不無」と「不

為不有」のそれぞれの傍わらに「不為」を非の字に置き
かえる書き入れがされていたのを混入させて伝えられた
のではなからうか。

次に問題とされる箇所は、第五の単復中仮の義を弁ず
る内、第二就復義論単復の項の文である。大乘玄論八不
義によると

假有是世諦、假無是真諦、此是單假。非有非無是中
道也、此是單中。假有假無為二、是俗諦複假。非有非
無不二、是俗諦複中。二不二、是真諦是複假。非二非
不二、是中道此是複中。正言非二非不二、尽有無非有
非無、所以正中也。^⑩

と記されている。これを慧均の八不義によると

假有是世諦、假無是真諦、此是單假。非有非無是中
道、此是單中、假有假無為二、是俗諦。非有非無不二、
是真諦是複假。非二非不二、是中道此是複中。正言非
二非不二、遣有無非有非無、所以是中也。

とあり、玄論の方が十字（傍線の部分）多いことになっ
て、それによって非有非無不二の了解に相違がでてくる。
この文の内容から考えるならば、假有假無を俗諦とし非
有非無を真諦とするのは撰山相承の伝統説であって、そ
の非二非不二を中道としてそれぞれを複假複中としてい

るのであるから、慧均の文は正しいといわねばならない。また仮有を世諦に仮無を真諦にとする単仮に対する、仮有仮不有・仮不無仮無の複仮は、後の第三就二諦論単復の項に論じられているので、別途の課題となる。既に指摘されているように、この第五弁單復中仮義の全文が大乗玄論第一二諦義の中に載せられており、その第二就複義論單復は慧均の八不義の文と同じであり、したがって玄論八不義に附加された十字は、一応まったく不要の句ということができるようである。しかし一方からするならば、非二非不二の中道復中に対して仮二仮不二の俗諦復中が立てられないわけではない。文中の非有非無不二は、その意味の上からも真諦であり複仮でなければならぬのであるから、その後には仮二仮不二は俗諦は復中の字句が入っても不自然ではないように思われる。そうすると玄論八不義に附加された「是俗諦復中不二」の八字は、「非有非無不二、是真諦是複仮」の文の後に位置づけるべきものとして、やはり行間に書入れられていたものが間違つて混入されたと考えられるのではないであろうか。

古くより大乘玄論八不義における会通の困難な箇処とされていたものを、慧均の八不義と対照させることによ

つて、玄論の文に附加された字句を削除すれば、ともに容易に理解しえるようである。しかし附加された字句の意味を考えてみると、それぞれにそれが置かれていることの意義を無視できないように思われる。そこで以上のような推測を重ねることを試みたのであるが、その結果として行間に書入れられていた字句の混入と考えてみたのである。

三

既に報告した慧均の八不義と玄論の八不義との比較対照において、次のような私見を加えたのであった。^⑩(一)、字句の相互出入している箇処があるが、その多くは玄論の文の方が慧均の文よりも整理されている。(二)、慧均の八不義にのみ載せられて、玄論にはみられない文や字句がある。これは慧均の方が適切な場合もある。しかし誤解をまねく恐れのある文の省略や、文章が整理された場合が多い。また真諦三蔵の説が批判の対象として掲載されていたのが、玄論においては省かれている。吉蔵は中論疏等にも多く真諦三蔵の説を引いている。しかし直接に批判の対象とはしていないようである。(四)、字句の前後が顛倒しているものがある。これは双方いずれかの誤

写とみてよいようである。そして(四)の字句の増補脱落については、その一部の検討を本稿において試みたのである。それは一字あるいは一句を加えることによって、一つの論理形態の定型化が壊れられ、別の形態があらわしだされ整えられる可能性をもつことになる。

例えば、旧説をあげる文において「不名非不語、不為非不無。不名不語、不為非不有」と「不名非不語、不為非不無。不名不語、不為非不有」とを並べると、その意味内容は別として、形態上からは「非不有非不無真諦中道」に前者がより近いのである。しかも法朗や吉蔵は、有無の世諦、非有非無の真諦という当時の二諦義の定型化を有所得として否定するはずであるから、非の一字の混入も不用意に軽視するわけにはいかないように思われる。

また次の複義に重複を論ずる項においても同じことがいえる。慧均の八不義によれば、仮有無の俗諦と非有無の真諦と非二不二の中道によって、一つの形態をとっていく要素をもつことになる。そこにもし非二非不二に待応する仮二仮不二を入れるならば、その双否を繰返し得るようになるであろう。この二例において、ともに行間の書入れが混入したのではないかという推測を試みた。いずれにしてもわずかの字句の相違に対する穿ちすぎの

きらいがないわけではない。しかし全体的な異同の状態からみて、そのように推測したのである。

それでは大乘玄論に所収の八不義についてどのような考えたらよいのであろうか。今までに検討したことをまとめると次のようになるであろう。

(一)、吉蔵が著わした中論疏や二諦義には八不義と同文あるいは同趣旨の依用が多くおこなわれている。

(二)、その場合の依用の文は慧均の八不義に近い。

(三)、慧均の八不義との対照において大乘玄論八不義にみられる異同の箇所は、問題となるところが吉蔵の考え方と密接な関係にあるように思われる。

(四)、吉蔵は注釈をすすめていくときに、師である法朗のことを多く引用して解説する。

吉蔵が中論疏の因縁品を釈するうち、その八不を解釈していくについては八不義からの多くの依用がなされ、それは直接の法朗の説示の引用と同等に扱われていることになる。これは現存する八不義が慧均の著わしたものとするよりは、法朗の著わしたものであるいは法朗がおこなった八不についての講義メモが整理され、門弟の間に常用されていたもの、とするのが妥当なのではないであろうか。既に大乘玄論の成立そのことに疑義がはさまれ

ているわけであるが、私見では、吉蔵の没後にその門弟によって吉蔵の手本が編輯されたものという説をとりたのである。その手本の中に法朗の講義のメモがあっても決して不思議ではないであろう。

註

- ① 中観論疏卷第二本、因縁品第一(大正四二・二〇b、また同二一b)。第二重階八不解釈の始めに、吉蔵の八不にいての位置づけが行なわれていると考える。私見では、吉蔵は僧肇の般若の構造に大きな影響を受けていると思うのであるが、僧肇のいう無知・無所知、そして無による否定を、二慧・二諦・八不と展開させているとみられる。

② 同(大正四二・二四b~c)

③ 同(大正四二・二五b~c)

④ 中観論疏卷二末、因縁品第一(大正四二・二八a。なお四重二諦等は同じく二八b~c)

⑤ 本稿提出の直前、駒沢大学の伊藤隆寿氏より「大乘玄論八不義の真偽問題(白)」(駒沢大学佛教学部論集第三号・一九六七年十二月)と題する詳細な論究の成果をいただいた。そこでは先ず玄論中の八不義と二諦義の重複部分の対照がなされ、相違点が提示されている。そして次に中論疏と八不義の共通箇処の比較検討がおこなわれている。したがっ

て本稿においては重複の繁をばくため削除することにした。氏の所論に対して敬意を表するとともに、大乘玄論という書は果してその題名のもとに、吉蔵によって著わされたものとしてよいのかどうか、という疑問を提したい。八不義に限らずおそらく、吉蔵が諸義をそれぞれにまとめたノートを、後に門弟によって整理されたと考えてみたのである。

⑥ 大乘玄論八不義(大正四五・二七b)二諦合明中道の文は対照させることでは不要であったが、全体の文を眺める上から掲載した。なお、国訳一切経諸宗部一の四六頁に示される字井博士による注を参照されたい。

⑦ 拙稿「慧均撰四論玄義八不義について(1)」(佛教学セミナー第12号・一九七〇年)中の比較対照表(27b(19)参

照

⑧ 中観論疏卷二本(大正四二・二四b)

⑨ 同(大正四二・一〇c)

⑩ 大乘玄論八不義(大正四五・三二c)、拙稿の対照表(32c(24)参照、なお国訳一切経諸宗部一の六三頁参照

⑪ 二諦義(大正四五・二〇c)には「正言、非二尺有無、非不二尺非有非無、所以是復中」となっているが、他は同じ文である。

⑫ 拙稿「慧均撰四論玄義八不義について(1)」参照